

明治 150 年企画特集（4） 一般人から専門紙記者への階段 ～歴史の節目と専門紙の役割～



日本水道新聞社 日本水道新聞 記者
武田 教秀

■専門紙記者になる

「入社までに読んで勉強しておくように」。日本水道新聞社に入社する 2005 年、書籍『近代水道 100 年の歩み』（日本水道新聞社刊）を内定通知と一緒に手渡された。本は就職試験用に調達した真面目な鞆に不真面目に放置され、そのまま入社日を迎えた。

入社日に「読んだか」と尋ねられた。「ハイ、勉強になりました」と笑顔で答える同期入社
の社員の隣で私は笑いを作ってうなずいた。その後、近代水道 100 年クイズが出題されるわけでもなく 13 年が経過した。「一般人」だった私に、年数相応に上下水道事業の知識が身に付いた。

大学の文系学部を卒業し、専門紙記者として就職した。日本には全ての業界に専門紙が存在すると言われる。おそらく大半の専門紙記者・社員は私と同じような経歴を歩んでいる。専門職の人と同じ時間と空間を過ごし、日々の業務をこなす最低限の忍耐力さえあれば、一定の会話に合わせられる知識とコミュニケーションスキルが身に付くことは、多くの専門紙業界の社員が社会の中で証明している。

学生時代、図書館で試験勉強に励む合間に本棚から魅力あるタイトルの背表紙の書籍を取り出すように、業務の合間に「仕事の資料」を閲覧することほど楽しいことはない。真面目な鞆の中の真面目な本は転勤と異動を繰り返す中で所在不明になってしまったが、当社の本棚から『近代水道 100 年の歩み』を取り出すことはいつしか日常となった。同様に全国の上水道事業の取材における歴史との答え合わせは、取材の中で欠かせない仕事となる。

■近代水道 100 年と当社

明治 150 年を翌年に控える今年、水道界は少し控え目に節目を迎えた。

2017 年は横浜に「近代水道」が完成してから 130 年の節目にあたる。近代水道の定義を大雑把に説明すると「ろ過処理」「有圧送水」「常時給水」の 3 点である。

英国人技術者・H.S.パーマーの指導のもと、都市化の進展の中でコレラなどの疫病が世界で流行し、その感染を予防する手立てとして構築された近代水道は今なお、日本の水道技術の基礎として底流を流れ、その節目の意義は大きなものと位置づけられる。

『近代水道 100 年の歩み』は近代水道 100 年という節目に当社から出版された書籍である。

記録を残すことを目的に歴史の振り返りに費やす手間と時間は膨大であり、日常業務と並行して行うことは至難の業である。



節目だからこそ、歴史に真摯に向き合い「過去を知り、未来につなげる」ための記録を示すことの意義は大きい。手前みそながら 30 年前の当社の功績の意義を感じている。

当社は、1988 年の近代水道 100 周年に合わせ、同書の出版とともに水道文化財として「近代水道 100 選」、主要な役割を果たした人物を「近代水道 100 人」として選考した。

近代水道 100 周年という水道界の節目に、「ヒト」と「モノ」に着目し、当社の社員が取材先や営業先の情報と歴史との答え合わせを可能にする資料が作られた。明治 150 年という社会の節目は、私たち専門紙が新たな記録を未来に残す好機と捉えている。

■明治期の青写真といま

先日、東京都水道局と旅行会社が開催した「水道のインフラを巡るツアー」のガイド役を務めさせて頂いた。ガイド役を担うにはあまりにも心許なく、予習としてガイドする施設を事前に視察した。

おぼつかない知識を整理しながら、自分の言葉で伝えられる東京水道の魅力を再考する。1300 万人に供給する緻密な水道の魅力を伝えるには説明せねばならない情報は山ほどある。給水地図をその場に一枚広げ、魅力を一つずつ説明したくなるが、施設を巡りながら 1 日かけて行うツアーではそんな時間は無く、正確な知識量も追いつかない。

至ったのは、明治期に描かれた東京水道の青写真を伝えることだった。明治期に描かれた青写真が今の東京水道の基礎となり、個別の課題解決を図るために幾多も枝分かれし、今の私たちの蛇口に至る水にストーリーにつながる。

ツアーで訪れる水道資産が、青写真でいかに描かれ、実現され、いかなる機能を社会と個人に果たしているかを当てはめこんでいくことをガイドの道筋とした。「ヒト」と「モノ」が織りなした「コト」を伝えることの難しさと大切さを実感した。

■「コト」の伝承から未来へ

上下水道を生業とする方々を読者に持つ当社が明治 150 年に何が出来るのか。ナショナルミニマムとしての上下水道の概成に立ち会う私たちが目指す未来は、臆気であっても見えている。

今ある資産を生かし、サステナブルな社会につなげていくことは、大きな挑戦となる。モグラたたきのように日々追われる課題をつぶしていくのではなく、再び壮大な青写真を描き、形にしていくことが使命となる。

当社の先輩方が残してくれた「ヒト」と「モノ」の記録から、現代社会と未来に寄与する「コト」の伝承につなげていきたい。

そしてその記録が未来の当社の新入社員が専門紙の一員として歩み始めるきっかけになった時、小さな成果を今の仲間たちで喜び合える日が来ることを願っている。



インフラツアーでガイドする筆者（右奥）